

対比検討を行なった結果は次のような結論を得た。

1. CT による肝容積計測では、対照群と各種肝疾患群の間に差はみとめられなかったが、肝硬変を成因別に分類すると、B型肝硬変では対照群に比し、肝容積の有意な縮小を認めた。

2. 肝硬変群のなかでは、アルコール性肝硬変の容積はB型肝硬変に比して、有意に増大していた。

3. B型・非B型肝硬変群において肝容積と Ch-E, T.Bil, ICGR15, HPT との間に有意な相関がみられた。

4. 非代償性肝硬変は代償性肝硬変に比して、肝容積の有意な縮小を認めた。

#### 8. CT による脾容積測定と US による spleen index との相関に関する検討

鰺沢 夏美・成澤林太郎 (新潟大学)  
尾崎 俊彦・市田 文弘 (第三内科)

当科入院症例59例を対象として、CT による脾容積測定を、プランメーターとマッププログラムを用い、各スライス面の面積を計測し、スライス幅を乗じて測定した。また spleen index は右側臥位で左肋間を探触子で走査し、脾の最大面積が得られた像より長径と短径を測定し、それらを乗じた値とした。以上の様にして求められた結果を検討したところ、① CT による脾容積と US による spleen index との間に正の相関がみられた ( $r=0.719$ )。② 慢性肝疾患において肝病変の進展にともない、US・CT 画像上、脾容積の増大がみとめられた。③ 触診可能な脾の平均容積は  $583 \pm 194 \text{cm}^3$  であり、腹腔鏡下で照診可能な平均容積は  $316 \pm 118 \text{cm}^3$  であった。

#### 9. 閉塞性胆管炎による多臓器不全21症例の検討

清水 武昭・篠川 主 (信楽園病院 外科)  
長谷川 滋・新国 恵也 (新潟大学 第一外科)  
佐藤 攻・土屋 嘉昭  
吉田 奎介

従来、我々は胆管炎を、軽症胆管炎と、ショック、腎不全などの臓器不全を伴う重症胆管炎とに分け、さらに胆管炎であるが故に肝臓に対する障害度より、減黄率b値を悪化させる肝障害型胆管炎と減黄率b値を悪化させない肝素通り型胆管炎(腎障害型胆管炎)とに分類し検討を重ねてきた。閉塞性胆管炎より多臓器不全、いわゆる MOF となった症例のうち減黄率b値が判定可能であった症例が21例あり検討したので報告する。

70才台が11例で男性は21例中16例でした。基礎疾患では、総胆管結石症13例、肝内結石症2例、胆管癌2例、膵癌1例、胃癌1例でした。21例の減黄率b値は、1群が11例と過半数でした。胆管炎より MOF となったのに、肝障害は軽度でした。1群では4群に比し病恹期間は短く、乏尿で、血清クレアチニン濃度は高く、リンパ球、血小板はすくなく肝と腎に対する反応が正反対で発症機転が異なると考えられた。

#### 10. 同一肝細胞癌症例における原発巣および皮膚転移巣の細胞培養の試み

前田 裕伸・荒木 進 (日本歯科大学新潟  
相川 啓子・曾我 憲二 (歯学部内科)  
柴崎 浩一  
本間 明 (済生会新潟総合  
病院内科)  
豊島 宗厚 (南部郷総合病院  
内科)  
小方 則夫・芦田 雅彦 (新潟大学ウイル  
ス学教室)  
浜田 忠弥  
佐藤 尚・広瀬 慎一 (新潟大学)  
上村 朝輝・市田 文弘 (第三内科)

56才男性で AFP 55ng/ml を示し肝細胞癌と診断された症例の原発・皮膚転移両巣より安定した培養細胞株を得た。原発巣株は核小体を含むやや明調で類円形の核と好酸性の胞体をもち敷石状に配列した。転移巣株では染色性は似ているが紡錘形でガラス壁への接着性が高く、不規則に肉腫様増殖を示し、その培養液は粘調性を示した。原発巣株はヌードマウスに移植可能で単クローン性の高い細胞となった。培養液中の AFP 活性は原発・転移巣両株で陰性で、転移巣株でのみ CEA が検出され、かつ Hyaluronic acid, Fibronectin の産生も上昇していた。しかし Ferritin,  $\beta_2$ -microglobulin,  $\alpha_1$ -antitrypsin, Sialic acid, Hyaluronidase 活性には差がなかった。原発巣株につき Southern blot hybridization を試みたが、HBV・DNA は free, integration いずれも検出されなかった。なお本症例の HLA は A1, A24, BW52, DR2 が陽性を示した。今後さらに両株細胞間における表現形質や各種感受性の相違につき検討を要すると考えられる。

#### 11. 肝疾患における IgA 測定の意義

太田 宏信・佐藤 尚 (新潟大学)  
荒川 謙二・本田 一典 (第三内科)  
山籬 昌由・吉田 俊明  
市田 文弘  
石原 清 (新潟大学医療技  
術短期大学部)

肝疾患における血清 IgA, 血清分泌型 IgA, 末梢血リ

ンパ球 in vitro IgA 産生能を測定し、その意義について検討した。血清 IgA の上昇はアルコール性肝障害に特異的なものではないが、その病態の進行とともに上昇する傾向がみられた。血清分泌型 IgA は肝疾患で上昇し、特に A 型肝炎、薬剤性肝障害、原発性胆汁性肝硬変、閉塞性黄疸など胆汁うっ滞症例で高値を示した。肝疾患においてこの測定は分泌型 IgA の重要な役割である局所免疫の状態を反映するものではなかった。末梢血リンパ球 in vitro IgA 産生能は肝疾患患者で上昇しているが、個人差が大きく、生体内でのリンパ球の機能を示しているものがどうかは不明であった。

## 12. 肝細胞癌患者の LAK 活性に関する基礎的検討

荒川 謙二・吉田 俊明 (新潟大学第三内科)  
市田 文弘  
石原 清 (同 医療短大)

ヒトリリンパ球を rIL-2 存在下で培養した時誘導される LAK 細胞について基礎的検討を行なった。

(方法) rIL-2 単独又は rIFN- $\gamma$  併存下で培養した末梢血リンパ球を攻撃細胞, NK 抵抗性の PLC/PRF/5 cell を標的細胞として  $^{51}\text{Cr}$  放出法により LAK 活性を測定した。

(成績) ① LAK 活性は培養 5 日目 peak に達した。② E/T ratio 10:1 から 80:1 までの範囲で LAK 活性は直線的に増加した。③ rIL-2 が高度になるに従い LAK 活性は亢進した。④ rIFN- $\gamma$  単独では LAK 誘導能は認められなかった。rIL-2 併存下では IL-2 単独に比し LAK 活性は軽度上昇した。⑤ 肝癌患者は健常者に比し LAK 活性は低い傾向にあり病態の進行した例ほど低かった。⑥ LAK 細胞は OKT11, OKT8, HLADR, IL-2 R 陽性細胞である可能性が示唆された。

## II. シンポジウム

### 「胆汁うっ滞の診断と治療」

司会 新潟大学第三内科  
上村 朝輝

#### 1. 胆汁うっ滞の病理

野本 実 (新潟大学第三内科)  
胆汁うっ滞の原因として、胆道系に①器質的な閉塞機

転のあるもの、②機能的なものとの2つに大別される。さらに、前者は、③肝外胆管の閉塞 (総胆管癌・結石・膵頭部癌など)、④肝内胆管の閉塞 (原発性胆汁性肝硬変、肝内胆管癌など) に分けられ、後者の代表的なものとして薬剤性肝障害による肝内胆汁うっ滞があげられる。胆道閉塞のある場合、それより末梢の胆道系に胆汁うっ滞がみられ、門脈域周囲の肝細胞内に Mallory body や銅顆粒がしばしばみられる。原発性胆汁性肝硬変 (70 例) および薬剤性肝障害 (160 例) の検討では、通常、薬剤による肝内胆汁うっ滞は小葉中心域が主体で良好な経過をとっていたが、黄疸遷延例が 9 例みられ、原発性胆汁性肝硬変の黄疸例と同様、小葉間胆管の消失が高度 (約 90%) で、これが臨床症状、予後に重要な役割を果たしていると思われる。

#### 2. 胆汁うっ滞の臨床

石原 清 (新潟大学医療技術短期大学部)

胆汁うっ滞症は肝外性と肝内性とに大別され、さらに後者は臨床経過により急性と慢性とに分類される。演者は急性肝内胆汁うっ滞の臨床像について検討し以下の成績を得た。

1) 肝内胆汁うっ滞症の組織像を示した 140 例中 103 例 (73.6%) が薬剤起因性であり、ウイルス性は 12 例 (8.6%) にすぎなかった。薬剤別にみると ajmaline (18) が最も多くついで pyriothioxine HCl (7), sulfonamide (6) の順であった。

2) skin rash や eosinophilia は薬剤性肝障害に比較的特異的であるがその頻度は必ずしも高くなく、起因薬剤によっても異なっていた。

3) sulfonamide による本症は遷延する例が多く 8 例中 6 例が 6 カ月以上の経過をとった。

4) 本症に対しステロイドは無効と考えられた。

5) 重症感染症時に見られる肝内胆汁うっ滞は予後不良であり、抗生剤による肝障害は考え難い例が多く endotoxin の関与が推定された。

#### 3. 胆汁うっ滞の画像診断

尾崎 俊彦 (新潟大学第三内科)

胆汁うっ滞 (黄疸) の鑑別ならびに質的診断における各種画像診断法の有用性と診断能の限界について検討した。対象は、過去 6 年間で顕性黄疸 (T. Bil  $\geq$  3mg/dl) を呈した内科的黄疸 164 例と外科的黄疸 99 例で、US, CT, ERCP, PTC の診断能について比較検討した。